
〇〇取扱注意！！

粒子分解

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

○○取扱注意!!

【Nコード】

N3597K

【作者名】

粒子分解

【あらすじ】

最近変な夢を見るようになった。高校一年の「夜崎 紅葉」文化祭の当日不思議な少女と出会う

注意事項1 前を向いて歩こう

なんだったんだろう、あの取扱注意の札を背中にはりつけた少女は・
・いや、うちの制服か。うん、あの背丈、見た目で高一なのか・
・ふーん。可愛いじゃないか

少女は明るくニコツとこちらに笑いかけ、背中にはりつけた「割れ物取扱注意」の札を揺らしながら走っていく

「ふぁー」

退屈だな、と言わんばかりの大きなあくびをして、これまた大きな伸びをした。3に針を合した、教室には場違い過ぎる大きくて、装飾の凝った時計が「ゴーン」とこれまた場違いな音を放つ。

面倒なホームルームを寝て過ごし、帰宅の準備を済ませてサツサと廊下に出ていき、ズサズサと足をすりながら、階段をだるーく下りていく、途中つまずきそうになった。

ガチャとドアノブをひねってとっとと帰ろうと思ったが、靴を替えるのを忘れていた。

靴を履き替えて、めんどくさそうに半開きになったドアをデコで押す。ズリズリと髪の毛が引っ掛かっていくがそんなことは気にしなかった。

誰も隣に居ない。まあいつもと同じことだから慣れた。

寒くなっていく10月の3時過ぎの今日の空は鈍い鼠色、ちょっとそこらの自販でコーヒーをかい、近くの公園のベンチにどっかり座

り、コーヒを一口飲んだ・・・あ、これブラックだ。口全体に苦い液体が広がる、少しうっとなったが買ったものはしょうがない、ちゃんと飲む。

無駄にだだっ広い、この公園。今座ってるのベンチのすぐ横にあるごみ箱にわざわざ少し遠くまで行きポイとフリースローの真似を試みる。ガ、入った。

小さく「うし」とガッツポーズをとり、公園から出ていく。

帰り道の大通り、何時もなら車が行きかうけど、今日は一台もない。寂し過ぎる大通り、ま、そんなこと思わないけど。鈍い色した鼠色の空は、鈍い色の灰いろに変わった。

そう思っているうちに、家に着いた。まあ今の時間帯は誰もいないんだけどね。けど一様「ただいま」ぼそりとつぶやいとく。

「ぬむい」さっきまで眠ってたけど。もう1回寝よう

ねえ、おきて。

真っ暗な視界から僕の耳に届くか細い声。

その小さく反響する声を頼りに、少しずつ、一步一步、ゆっくりと。声との距離が近くなっていく。

——突然、声が途切れた。

何故かはわからない。僕は酷く悲しみを覚えた。

それを感情として理解する前に僕は叫んでいた「——行かないで！
——僕を独りにしないで！！」

第三人称視点で泣き崩れる僕が、僕の瞳に映った。

「っん・・・」

なんか変な夢見たな……。そう思ってるうちにほとんど、奇声じみた叫び声が耳を襲った

「紅葉！！——ご飯——！！！！！！」
うるさい、聞こえてるっつの。

「あ、今うるさいって思ったでしょ！！！？思ったでしょ！！！？」
今、人の部屋を無断＋ドアに蹴りを入れて。入ってきたのはうちの
元氣過ぎる「馬鹿妹」ドア・・・戻すの面倒だな・・・。

「早く来ないと晩御飯な抜きだからね！！」

また耳が痛くなるほどの奇声じみた声が耳を劈く。もう耳がキーン
ってなってる

僕は耳を弄りながら階段を一段飛ばしで降りて行き最後の二段を特に理由はないがぴょんと飛んだ。が、着地に失敗足を挫いた。あんなし痛く——痛かった

「ホントお兄ちゃん馬鹿だよな。」

薄く蔑むちょい痛いものを見るような眼で俺を目線で罵倒した。突っ込むと逆にたたかれるので止めておいた。

さてさて今日の晩御飯は何だろうか、鼻をクンクンひくつかせてみ
たが結構おいしそうな匂いが鼻を刺激した。

「今日わね！ハンバーグ作ったんだ」

先ほどとは打って変わって、天使のような笑顔を见せていた。・・・
だが残念なことに僕には向けていない。どうやら今日は親が居ない
ことをいいことに、彼氏さんを連れてきたようだ。このリア充め！
！！・・・

「あ、今リア充が！！とかって思ったでしょ！！でしょ！！」
うるさい。

「あ、こんばんわんわ！！紅葉さんお邪魔してます、あのー小百合
が食べていけっというから来たんですけど迷惑じゃないですか？」
すっごく迷惑！！・・・と言いたいところだが。普通ならね。けど生
憎こんな妹でも一様自分の妹だからね。

「いや、大丈夫だよ、純人すみとそんなこと言うと逆に小百合に怒られる
よ？」

少し優しめの言葉を振ってやった。

「すみません（照れ）」

ちょっと可愛い。とか思ってみたりした

「ねー紅葉？、可愛い妹の為にならアッチで食べてくれるよね？」
だったらここに呼ぶなよ・・・

「あー！！今、呼ぶなよと思ったでしょ！！」
面倒なので適当にあしらって、自分でご飯を盛り、ハンバーグを3
つほどご飯の上に置いてリビングへと向かった。おっと箸忘れた。

「おおー!!!うめー!!!」

叫んだのは、純人。そうかそうか。うまいか。うしじゃ俺も一口
「ぬおお!!!うめええ!!!」

うまい、コイツの作る料理は何時も絶品だからな・・・お母さんよりもうまい。はつきり言って。

「でしょー!!!?」と奇声じみた甲高い声で小百合が叫ぶ。

たらふく食って、水を一杯飲んで、キッチンへと足を運んだ。

「いやー何時たべても小百合の料理は上手いよなー。誰に教わってんだ?」

僕だよ。僕

「えーとね、イタリアの知人のマルコ・ポーロニさん!!!」
コイツ大嘘吐きやがった。

「僕だよ、コイツに料理教えたの」
そういうと何故か小百合はこっちを少しにらんだ

「そうなのか?」

純人は尋ねる

「・・・うん、まあそう」

「へー!!!凄いじゃんか!!!小百合はいいなこんな良いお兄ちゃんが居て!!!」

まあな、そうだろ。うんそうだろ。

「別に・・・」

冷たく、素っ気無く言われて、若干傷ついた。

「紅葉!!!、今度ケーキ教えて・・・!!!」

ビシッ、とこちらを人差し指で差して奇声じみた声でまた叫ぶ・・・
良くこいつといて壊れないもんだ・・・僕の耳は

「ああ、いいよ」

「ありがとうお兄ちゃん!!!」

時折聞くこの「お兄ちゃん」という呼び方妙に優しく、言われ慣

れない、呼び方の為に若干嬉しくて頬が赤らんだ。これがあるからコイツを嫌いになれない。

——「あ、じゃ僕もう帰りますね」

純人は、帰ろうとしたが、何故か俺が引き留めた

「まあ、泊まっていきなよ」

「良いんですか？」

「明日の夜まで、親、旅行で居ないし。ほら明日土曜日だし。遠慮しないで」

意外な行動に小百合は頬を赤くしていた。

「あ、もちろん3人で寝るけどな」

「い、いいもん、3人でも！！」

緊張しすぎているのか、声が引き攣っている。つくづく可愛い妹だ。と言うことで、純人は泊まることになった。

パジャマを貸してやり僕と純人が一緒にお風呂に入ることになった。先に湯船につかる。

シャワーを浴びる純人に声をかけた。

「なあ、純人、小百合の事大事にしるよ？」

「え？は、はい！！もちろんです」

良い反応だ。ありふれた会話をしながら

風呂を上がった。身体が温まったせいか眠くなったので、リビングに布団を敷いて枕を3つ、紙に名前を書いて枕にはりつけた左から順に僕、小百合、純人、だ。

流石に真ん中に行こうかと思ったが、こんな近くで変なことはしないだろう（考え過ぎじゃないか？）

掛け布団を、かけて先に寝た

——ねえ、——私をここから連れ出して——

私に優しくして——独りにしたりしないで——

か細い声が聞こえる、今度は前よりはっきり聞こえる。

その声を頼りに、少しだけ早歩きをした

徐々に声は大きくなっていき、より鮮明になる

ねえ、私を助けて、私を独りにしないで

私をここから連れ出して、私に優しくして。

独りにしないで、私を——愛して——

すすり泣くような声が鼓膜を震わす。

スピードを上げて、駆け寄る、ふっ声が止んだ。

——す——た——た——だ

また泣き叫ぶ僕を僕が見ている

また夢か・・・最近よく見るようになった。この夢は何だろう。まあどうでもいいか。

隣を見ると小百合が居なくなっていた、純人がスースーと寝息を立

てて眠っている。本当に可愛いな。

チュー、シュツシュ、ジュー

どうやら、小百合は朝ごはんを作っているようだ

時計を見ると・・・長い針が12、短い針が8を差していた

「ああ！！やばい学校遅れる！！」

今日は土曜日なのだが、実は今日は文化祭なのだ。まあ1時から始まるのだが色々と準備があるため、さっと着替えた。小百合はそれを察知していたかのようにちよっとおきめのおにぎりをおにぎりを僕に渡す、

「行ってらっしゃい！！」

優しい声が僕の鼓膜を撫でる

「ああ、行ってくる」

「あ、お兄ちゃん、ギター忘れてる」

「悪いな」

はい、よ。ギターを背中に掛けられてドアを押した。僕はおにぎりをかじりながら、眩しいそらの太陽を少し見上げて、学校へと歩き出した。

——あ、ドア直すの忘れた。

注意事項1 前を向いて歩こう（後書き）

文化祭当日

注意事項1 前を向いて歩こうー2 (前書き)

文化祭当日

注意事項1 前を向いて歩こう―2

小百合に壊されたドアの事を考えながら、学校への道を歩いていく。
…もちろん独りでだ。

僕は友達が少ない、理由は、皆同じ方向じゃないからだ、僕が通う
A高校は超エリート校であり、この街の中ではたった三人だ、一人
は先輩の日野 英治、もう一人は同学年同クラスの湖宮 風花だけ
だ、あとは知らない。大体人と関わるのは苦手だし皆若干に怖がら
れてるしな…まあこれはまた今度の話。

おっと、時間がやばいあと十分で着かなきゃ軽音部の奴らに殺られ
る…「急げ」と足に力を入れて、駆けだした。

真っすぐ走っていき、三つ目の十字路を左に曲がる。

がつん

「おわあ!!!?!」

「きゃあ!!!?!」

誰かにぶつかった…女の子みたいだ、やわらかい。

「いたた・・・いってー」

のそのそと立ち上がって僕はその子に手を差し伸べた、つもりだっ
たがそれよりも早く少女は立ち上がって笑っていた。

「えへへ、大丈夫ですか」

と手を差しのべられていた。

「えーと、じゃ私急いでるんで済みません!!」

チラリと一の文字がのぞく。そう言ってその少女は背中に貼り付けられた「割れ物取扱注意」札を揺らして走っていく。僕はそのきれいすぎる笑顔に目を奪われた：ポカーンと口をあけていると曲がり角から昨日の公園の時計が見えた7時30分：やばい殺られる。

僕は立ち上がり、あの「割れ物注意」の少女を瞳にあ焼いたまま、僕も走って行った。そして僕は走りながら思った：何処かで聞いたような：

「セーフか？」

「ギリギリ」

僕の独りごとに反応したのは、数少ない、学校の友達の一之瀬 朔^{いちのせ さく}だ。

決して可愛いとは言えないのかもしれないが、そして軽音部のサブボーカルでもある。

「さっさと用意して練習始めるから、あ、そうだ、亮ちゃん怒ったよ？『ピクケース何処に置いたんじやボケえ！！』って。」
まずい、それは結構まずい：ピクケース何処に置いたつけ、と僕は必死に脳裏の履歴を探す：あ、家だ。やばいぞこれは：。亮を怒らせらまずいことになる。一之瀬^{いちのせ} 亮朔^{りょう}の兄であり、部長兼この学校の番長：やばい。そう思っていると首筋をふー、と生温かい吐息を掛けられた：これをやるのはあの人しかない、僕の体はガタガタ震えている、そこまで異様な反応を起こすのも無理はない。だが振り向けないなぜなら後ろに立っているのは番長その人なのだから：。

「こゝろよーちやあん」

「は・・・はあい・・・」

僕は威圧感に流され、ぎちぎちと聞こえそうなほどに千切れそうに細かく震えながら、後ろを向いてしまう。そこにはあり得ないほどの闇のオーラが漂う壊れた笑顔があった。

「ピックアップはどこかなあ？かなあ？・・・ひひ？」

：誰か助けてくださいここには悪魔が居ますエクソシストでもデビルハンターでも何でもいいから助けてください！！と思う自分とは裏腹にガチガチ奥歯を鳴らしながら：僕は言っていた

「い、家です」

「そうかそうか：んじゃ文化祭終わったらとりに行くね？」

あ、あれ怒らなかつた？：てか今まで一度も僕は怒られた事無くな
いか？

そういえば、番長、番長、言われてるけど喧嘩したところどころか、
暴言さえ言われた事はないな：。もしかして、根っからのいい人？
半年も同じ部活に居るというのに気づけない僕は馬鹿なのだろう。

「すみません」

「お前自分のは持ってきてるよな？」

慌てて僕は自分の、ギターをあさる、あ、ちゃんと入っていた。ピ
ックもベース用のも入っていた。

「んじゃ、ベース用のピック貸してくれや、今ちよつと指があれだから…」

そう言いながら亮は僕に右手の人差指と親指を見せる、あ、折れてる

「ど、どうしたんですか!!? それ」

「転んで着いた(笑い)まさか折れるとは思わなかったけどさ、ベース誰か代わりにやってくれないかな…」

とか言いつつ僕らは練習に取り掛かる、あ、言っとくけど部員は全員で5人だ。あとの2人は遅刻だろうか、まあそんなことに頭を抱えてもしょうがないので、練習始め。あ、因みに僕はこの軽音部のギター兼ボーカルだ。あれまだフルネームって言ってなかったけ? そうかそうか、僕の名前は夜崎 紅葉だ。紅葉でいいよ。…って何独りごちに花咲かせてるんだ…僕は、癖はお察しの通り独りごと、身長は180センチ位、一年生の中では一番大きい、はず…

がらがら…いきなりドアが開いたその音に皆反応する。そしてドアをあけたそいつの第一声

「ぎりぎりか!?’

「いや。遅いから」

三人口を綺麗にそろえて、そいつに吐いた。吐かれたそいつの名はドラムの翔、

戸三 翔だ。遅いからと言われたショックでへなへなどらしなく腰を地べたに着けた。ドラムも来たと言ううことで、本格的に練習開始!!

練習が終わりHRに行くため早めに解散した、途中のどが渴いたのでジュースを買った。

教室にたどり着き、自分の席へと腰を下ろす。

「起立!!」

ちょ、今座ったばっかなのに。

「礼!!」

のろのろと頭を下ろしてぼそぼそと「おはようございます」をいった。

実は文化祭は1時から始まるそれまでは、装飾の点検、進行の最終点検などをする、だが軽音部は放送部が準備をするので、暇だった、とりあえず寝よう

———ねえ、起きて。

また、声がする。僕はまたその声のする方へと駆けていく、

———独りにしないで、

「独りになんかさせない!!、だから待ってくれ!!」

誰かも解らぬその声に僕は、叫んでいた。自然と足が速くなっていく

スピードが上がるにつれて、声も鮮明に大きくなる

——私をここから連れ出して、私を愛して——私を——

「僕が！！、僕が君をそこから出してやる！！…僕が、僕が君を愛してやる！！！！」

なんでここまで必死だか僕も解らない、僕の足は、ただただ、距離を縮めるだけに動いた。ただただ、走った

「——だから、そこで待っていてくれ！！…僕が君を——」

僕は、何も見えない虚空に手を投げて、必死につかもうとした。僕の右手が宙を仰ぐ、

すか、すか、すか

まるで、雲を掴もうとする、子供のように…必死に、闇雲に、何も見えない暗がりの中を駆ける。ふと気付いた、声に近づけない…。僕はただ同じ場所で、走っている

おぶう…やばい僕…思いつきり手伸ばしてる…。リアルで…

誰も…居ないよな…。俺は辺りを見回そうとした…だがしかしそんな期待は裏切られることが筋…思い切りクラスの皆から、蔑みの視線を感じる…

「——なにやってるの？」「アイツ行かないで！！」とかいてった
マジ受けるwww」

…は、僕が人と関わるのが嫌いな理由1だ

注意事項1 前を向いて歩こうー2 (後書き)

すこし手抜きだ W W W

注意事項1 前を向いて歩こうー3 (前書き)

独りごと

注意事項1 前を向いて歩こうー3

僕は…赤面して、教室から抜けた。というか、要れる方がどうかしてると思う。

まあ、とりあえず、自販にクルピスでも…そう思いながら、僕は廊下を駆けて、階段を滑り降りて、裏口のすぐ横にある自販に120円を投入し、クルピスのボタンを…ポチっと、ガタン、見た目と裏腹にどでかい音をたてて、クルピスが落ちてきた。少し「ほう」と驚きながらも、クルピスを手に取り、「カシュ」と開けた、そのまゝ、口元に運び…飲もう…とした。

ゴン…少しばかり鈍い音と共に少しばかりの激痛が後頭部を走った。

「抜けだし厳禁!!」

やっぱり…、俺の後頭部を名簿らしきもので叩いてきたのは担任の山本 弘世やまもと ひろせあ、初めて見る?。まあ、そりゃそうだよ、HRでないもんねこの人。この学校超エリートばつかなのに不良だとかが居るからね…授業抜けだしとかもう…日常茶飯事、なんで、お前がこんな学校に居る!!? ってやつも結構多い。

まあ、そんなことは知ったこっちゃない。

「痛いじゃないですか…。」

「今は、授業中だ!抜けだしは親連になるぞ!?」

…親連?そんなことも知ったこっちゃありません。どうでもいいです。

「すみません。ですけど…今は休み時間です。ていうか、今は準備時間ですよ？何したって良いじゃないですか。準備することないんだし。」

ちよつとばかり、痛みのせいで、口調が強くなったかもしれない。だがしかし、僕は間違ったことは言っちゃいない。正論だ。

「おお、そうか…ずっと外に居るから気づかなくてな、…悪かった。すまん」

素直が一番だよ、先生。と心の中で多少上から目線で、見てやっから、んじゃ、と僕はクルピスを飲みながら第一音楽室（軽音部部屋）に暇だから、練習しに行った。

ガラガラガラ――

勢いよく扉を開けて、銃を構えるふりをする。腰を屈めて、どこぞの蛇さんの真似を試みる。すると背後から

「HQ!!」

と叫ばれてびっくりした。誰もいないと思ったのに、恥ずかしいじゃないか。

「おい紅葉、おまえ何やってんだ？」

亮だった。

「んや、ひまだから…ちょっと、ビックボスにでもなろうと…はは。」

「そうか、んじゃ、また会おう!!」

と、言いながら、どこぞの液体のポーズをしてきて走り去って行った。ホント、分らない人だな。まあいや、ちょうど部室には誰もいないし。久々に誰もいない教室で練習したかったんだよね…。

あ、ギター教室に置きっぱだ。…だるいなーと思いつつもとりに行く。

少し早歩きになっていく自分の歩調にステップを点け加え、軽やかに廊下を、階段を駆け上がる…。

みつけ、とまた音楽室へと駆ける。

だだだだっだ!!、向こう側から走っていく音が聞こえてくる…これは、もしかしてフラグだな、うん。無理止まれない。あーあぶつかる!!…!!…!!

ガン!!…!!

と、物凄い勢いで顔面から衝突した…やわらかいものが唇を掠めたような気もした。…気がした。…うん痛いよ?

「のわぁ!!…!!」「うぶう…」

顔を上げると…朔が居た。

「もー!! ちゃんと前見てよね!! てか、廊下は走らないでよね
!!!!!!」

と、どこぞの、ツンデレのような口調で人差し指をこっちに差す、
本当に、小百合に似てる…。

「あ、あと…いま…唇が…いや…なわけないか」

「え?」

「だ、だから!! いいの!!!!」

「……。」

やっぱり掠ったっぽい。まあ、いいか。気にせん気にせん。

「お前も練習か?」

「悪い?」

「うん、独りで練習したい。だからあっち行ってくれないか…?」

「おっけー、紅葉は独りで練習する方が好きだもんね…バンドなの
に。(笑)」

「うん…まあ一曲練習したら、チョイ歌ってくれ」

そう言って、僕は音楽室で…寝る。ごめん練習とか嘘、いっつも寝
てるだけ、この場所が落ちつく、普段騒がしい場所の静けさは何と

思い得ない。とはいっても、音だけだしとこ。

じゃーんだとか……

「う……」

僕は目が覚めた。ここはどこだろう？…見覚えがある、ココは夢のあの場所？何だろう、いつも見てるけど…こういう風になるのは初めてだな…。

何時も聞こえてくる声は聞こえない。…。じゃあ僕から声を出そう…何故からは解らなかったけど、そう思った。

「なあ…何処に居るんだ？何時も僕を呼んでいる君は今どこに居る？…なあ」

と、言っただけだった。声が出ていないようだ…狭くて小さい廊下のような…この長い部屋。口だけは動いていたが、声は反響しない、自分の声さえ、聞こえない。

もう少し踏ん張って声を張り上げた

「なあ！！！！何処に居るんだ！！！！」

——私を見つけて——私をここから出して——

あの声だ…はっきり聞こえる、今まで以上に。

もう気づいた時には僕は走り出している。全力で：

「うあー!!」

転んだ。だけどそんなことを気にしている暇はない：早く、早く見つけなきゃ!!

もっと、知らず知らずに虚空を仰ぐ自分の腕。いつの間にか熱く涙でぬれていた頬。気にしない。

すると僕の目に映ったのは、あの少女だった。

注意事項1 前を向いて歩こう―3 (後書き)

夢で叫ぶ

注意事項1 前を向いて歩こうー4 (前書き)

出会う

注意事項1 前を向いて歩こうー4

「おまえ…あの時の」

僕は、声を掛けた―はずだった。そのはずなのだ。だけど、僕は口すら動いていなかった。動揺を隠せない、僕の目の前に居るのは、あの登校する時にぶつかった少女なのだ。分からない。

何故か、僕は気が動転している。

理由が分からないびくつき。あの少女は、僕を見据えている。僕は、少しの恐怖を覚えた。

「助けて…助けて、」

少女の目は潤んでいた。

暗闇に慣れてきた、僕の目には、さっきよりも少女の全体が見える。少女は椅子に縛り付けられているようだ、身震いをして、ガタガタ、雨の中の子犬のように震えていた。

僕の体はまだ動かない、少女はさらに身を震わせ、椅子をガタガタふるわせる

「いや――置いてかないで！！やだ、私を助けて、独りにしないで――私を…愛して」

少女を見ている僕は、自分の頬が濡れていることに気がつくのに、少し時間を要した。僕はどうせ、動きもしない口を、必死に動かした、「僕が…僕が助ける、だから、…泣かないで」

「…本当？」

立ち止まって見ているだけの僕に、少女は言葉を返した、口も声も出てはいなかったのに、少女は僕に、涙を浮かべた暗いまなざしで。少女は僕に言葉をかえした。不思議がる僕に少女はつづける。

「アナタと私に言葉は無い、…私は、私の名前は————」

「……」

何とも、意味不明な夢を見たものだ。すっかり冷めてしまった僕は、夢の中の少女と「アノ」少女の事を考えていた。なぜ僕の夢の少女が「アノ」少女なのか…。まあ…考えてもしょうがない、か。

僕は余り気にとめないことにし、ふと時計を見た

「あ、3時だ。」

すっかり寝過してしまった。まあ、僕がやることは無いので別に良いんだけど…。昼食を寝過してしまったために、とてもお腹が空いた、いま腹の虫が大きな音を立てた。

「まだ、時間あるし…でみせやってる、グループから、なんか貰おう。」

そうおもった僕は、音楽室を出た。

「おう、紅葉こうよう、なんかおごるぜ!？」

コイツは…確か日野宮ひのみや 幸助こうすけ数少ない、友達だ。焼きそばをやっているらしい。遠慮することなく、焼きそばを3つ貰ってあげた。感謝しろ。

「紅葉、あとで、バンド行くからな、席たのむぜ?」

ほいほい、わかった、と言っておく、僕はドジらしいが、要領は良い、もうすでに日野宮の席はとってある。流石僕。

暇だ暇だ、とぼくぼく歩く。もうそろ、軽音部の時間だ。だるい。

はつきり言って、アノ一之瀬兄弟にやらせときゃ、何とかなる、あ、ベースは負傷か…。朔にギターを任せて…僕がベース?…いや、生憎ベースは趣味じゃない。僕はヴォーカルだ(ココ大事)。まあ、しょうがないか、と、僕は、体育館へと足を運んだ。

まだ、演劇部が芝居をやっていた…暇なので、開いてる席に腰を掛けた。

「…。」

何とも言えない…僕はこういう…何だろう、大げさな芝居が嫌いだ。「お前は誰に言ってるんだ?」と聞きたくなる。暇つぶし暇つぶし…と薄眼だけを開けて、じっと見ていた。

劇が終わったころ、亮が入ってきた。

「おう、紅葉！何処に行ってたんだよ…探したんだぜ？あ、そうだとベース出来そうだ。」

「あ、亮」

「あ、亮じゃねえよ…ほら、部隊準備手伝いやがれ。」

「亮、別に僕たちがやることは無いと思いますが…」

「あれ？そうだったけ？ああ、そかそか、放送部がやってくれるんだっけか？」

「そうです、だから、やることはありませんよ。」

「そっかあ…あ、朔…見なかったか？」

「いや、見てませんね…。！、来ましたよ」

朔が亮横を通り抜けて、体育館に入る。

「なあ、朔、翔は？」

亮が聞いた、そういえば翔とは朝練の日以来あってないな…。

「えーと、翔は、先に体育館に行くって言ってたけど？会ってない？」

「うん、会ってない。」

亮と僕は、声をそろえて言った。

演劇部が、片づけているころ合を見て、朔が叫んだ。

「おい、翔！！何処に居るの？」

「んあ？」

と、びっくりしたような大きな、声。――ガタン、と椅子から落ちる音。どうしようもない、この馬鹿は…。

どうやら、翔は、暇つぶしに演劇部の劇を見ていて、退屈過ぎて寝てしまったようだ。まあ、内容があれだから、しょうがないよな…。

とりあえず、メンバーがそろったということで、最後の音合わせをした。

「うし、大丈夫だね、ねえ、紅葉、もうちょっと声出してね？」

朔から、文句が来た。

「さっき、寝てたから…ちょっとのどの調子が…えふん、えふん」

と、咳払い、まあ、時間になったら、大丈夫だろう。

時間が来た。

客入りは、申し分ない、と言うよりはあんまりいると緊張してしまう。目測で、40人程度だろうか、日野宮も、一番前の席で腰をゆ

ったり下ろしている。

「紅葉！！！！気い抜けよ！！！！？」

余計な御世話だよ、と言っておいた。

バンドの演奏が始まる。

声の調子も上々、いい感じだ、自分が奏でるギターのおと、亮のベース、翔のドラムがとても心地いい、朔のコーラスはとても綺麗で、耳を撫でられる気分だった。

演奏が終わり、客からの拍手。アンコールという声もちらほら聞こえる。

「亮、アンコールだってよ」

「おれは別に良いぜ？オリジナルでも披露しちゃうか？」

「そうだね」

後ろから、翔も答えた。朔齒と言うと、…疲れたように黙っている。

「うし、ーじゃあ、僕らのオリジナル曲、聞いてください。――――」

僕らの、奏でる音響が、広い体育館に拍手と喝さいをもハーモニーにしながら、強く響いた。

「おつかれー、よかったよー」

「そうだね、まあ無事に終わってよかった、って感じかな。」

と皆が部室（第一音楽室）で、コーラなどを飲みながら、だべる。

あーあ…疲れた、と喉をさすりながら、僕は独り、音楽室を出た。

空はすっかり暗くなった午後7時、この暗がりにはアノ夢の世界となんとか、似ているようなそんな気がした。

ふと、廊下の窓から、視線を落としたとき、あの少女の姿が、目に映った。

「おーい!!」

と、僕は唐突に話しかける。すると少女はこちら井に気づいて上を見上げる。

「あ、朝の人ですね？、軽音部見ましたよ？凄く良かったです!!」

上目づかいで、少女…っていうか、少女、少女言ってるけど、同年代なのか…。今頃気づいた。

彼女…でいいか。彼女の、言葉がともうれしかった。

「そ、そうか…あ、ありがとうな」

「いえいえ、ありがとうを伝えるのはこちらの方です、とてもいい思い出になりました。」

「あ、あのさ、この後暇かなあ？暇だったらで良いから、僕と、廻らない？」

自分でも理由が解らない、だけど、僕の口はもう、動いてしまったあとだった、変なことを…まあどうでもいいか。

「い、…良いですよ？急でびっくりしましたけど、」

マジか…。予想外の答えに、僕は立ちすくんでしまった。

…ただ今、心拍数上昇中。

注意事項1 前を向いて歩こうー4（後書き）

登場人物紹介

夜崎 よさき 紅葉 こうよう

性別..男

年齢..15

高校一年生、軽音部ボーカル、だけど、あまり熱心じゃない。

夢に出てくる少女と、学校の割れ物札の少女が似ていることに疑問を抱いている。

次回、夜間デートのフラグ

注意事項2 忘れ物はしないこと（前書き）

なんかのフラグ

注意事項2 忘れ物はしないこと

どんどん上昇し続ける、心拍数と裏腹に、僕の行動はやけに落ちついている。

落ちついて、教室を出て、落ちついて人込みを避けて、落ちついて彼女の元へと、落ちついて、距離縮めていく。

立ち入り禁止の壁紙が貼られている、裏門へと続く扉を開けて、先ほどまで、彼女が居た場所をきよろきよろと視線を忙しく、それでも落ちついて彼女を探した。

「あ、あの、こっちですよ？」

と、いきなり後ろから、聞こえた声にびっくりして、飛び上がり、足を挫いた。

「あ！あのく大丈夫ですか？」

彼女は、上から優しい視線を送っている。その視線を凝視できない僕は、思わず視線をそらしてしまう。

しばし、おどおどした時間が続き、彼女は柔らかさそうで、真っ白な手を差し伸ばす。

キョトンとした顔つきでいる僕に、彼女はこう問いかけた。

「あ、あの、はい」

少し、照れた顔つきになりながらも、僕は、やっとの思いで、彼女の手を掴んだ。

ぐらつきながらも、体制を整え、あははー、と笑ってみる

「もしかして、ドジ なんですか？」

・・・しばしの沈黙、僕は一番聞かれたくないことを尽く聞かれた。僕は基本、初めて会う人などに、「きみって、ドジ？」と、聞かれてしまう。こ、これでも、治った方なんだ！！昔は…これはまた、別の話。

おどおど、としている僕は握りっぱなしにしていた、手によく気が付いた。慌てて、その手を振りほどいた。と言うか、うん、なんだろう、そう、もう、振りほどいたで良いや。

「あ、ごめん「あ、ごめんなさい」」

すこし、遅れて彼女が言った。自分たちの手を見て、双方ともに顔を上げる。

「あ、あの、そういえば…名前、まだ知らないですよね…。」

あ、そういえばそうだった。

「あ、えと、僕は、じゃなくて、僕の名前は「夜崎 紅葉」よさ…え？」

「夜崎 紅葉って言うんでしょ？」

彼女は、知らないはずの僕の名前を知っていた。何故？と顔をしかめる僕に、彼女は優しく、笑いかける。

「軽音、見えました。」

「あ、あそうなの？けど…、メンバー紹介とかしてないよ？」

そうなのだ、メンバー紹介などは、やった記憶がない、というより、胸を張って「やってない」と言える。あと、一之瀬兄弟（妹）はそこそこ、名も、顔も知られているが、（亮さんはヤンキーとして、朔は容量が良いからだと思う。）しかし、自分は目立ったルックスでもなければ、ポテンシャルもない。別に委員会に入っているわけでもないければ、浮いているわけではない、（少し浮いている気もしないことないのだけれど）だが、彼女は僕を知っているようだ。何故？と、問いかける前に彼女は、こういった。

「覚えてないんですか？」

と、一言そういった。戸惑いながらも必死に僕は思い出すとする。

……………あ、僕記憶力ないや。

少しの間が空いて、やっと口から疑問の音色たっぷりの音がでた。

「え？」

彼女は、顔を斜めにして、少しだけ高い位置にある僕の顔を見上げている。

「ううん、なんでもないですよ…」

そういつて、彼女は今日の朝みたいに、にっこりとほほ笑んだ。

「さ、時間もあれですし、回りましょっか？」

おう、とうなずくしかない僕。彼女はそれだけを言って、先に行ってしまった。

その姿を見ながら僕はまた、思い出そうと懸命に、記憶を探った。けれど、彼女の記憶は、アノ夢の少女としか重ならない。もう少し深く考えてみる。

やはり浮かばない。

「おうい、ちょっと待ってくれよ!!」

すっかり取り残されてしまった僕は駆けだす。彼女の歩幅は意外と広く、やけに急げ足だ。

あ、そういえば名前聞いてないや。

やっとのことで、追いつき紅葉は少し息を荒くさせていた。ここは二階の2―3の教室。

執事喫茶だそうだ。彼女はもう席に座っていて、こっちこっち、と手を振っている。

紅葉は、椅子をひき席について、若干こわばった顎を動かした。

「あ、あのさ、名前……まだ聞いてないんだけど……なんていうの？」

「……あ、名乗らせという……というか、自分は紅葉さんを知っている

のに、名乗るの忘れてました。」

彼女は、思い切りの笑顔を僕に向ける。その笑顔はまるで、快晴の空の下の一輪の花のよう……て、なに気持ちの悪いことを言ってるんだか……。 (正確には思ったただけだが、そこには突っ込まないでほしい。)

「えーとね。私の名前は藤戸^{ふじと} 薫^{かおる}。みんなからは、ふでいゝとかかおりんだとかって呼ばれてる。あ、あと、1年1組、紅葉さんは3組でしょ？」

…はいそうです。かおる…か、どっかで着たような気がするけど…。まあ、記憶力の無いノウミソに頼ったところで、思い出せはしないので、諦めた。

「…紅葉さん、私たち、別初めましてじゃないんですよ？」

「え？ そうなの？ …ごめん記憶力が乏しいんだ。覚えてない…。」

「まあ、そうですよね。中学は別々でしたし…それに…紅葉さんは…」

途中で、薫は口を止めた。

「中学『は』別々う！！！？…ってことは小学校は同じだったってこと？」

薫は、はい、と小さく頷き、先に頼んでいたのであろう、ミルクティーをちびちび飲みだす。はぁ？ と顔を歪ませたままの紅葉は必死に、無い記憶を探っていた。

（薫と…学校同じだった？…薫て…おい、考え事だからって…呼び捨ては…どうせしらねえか…はは）

「紅葉さんもなにか、頼みます？」

「え？ いや…うん、コーラ頼む。」

薫は、執事もどきの格好をした店員（コスプレした、生徒なのは言うまでもない。）に「コーラひとつくださあい」と、語尾を充分に伸ばして頼んだ。

全く、なんなのだろうか…。

わずか10秒程度で、コーラが運ばれてきた。それもそのはず、カウンターらしき向こう側には、ジュースの入ったペットボトルと、氷が。…そりやどうだよな、学校にあの…なんだ、ドリンクバーでいいのか？があるわけないもんな。はは。

薫と紅葉は、ストローの先をチューチューやりながら、少しの間見詰めあった。自分たちの視線が重なってりる事を理化した瞬間、パツとめをそらした。

注意事項2 忘れ物はしないこと（後書き）

リア充もどき

・・・け

注意事項2 忘れ物はしないことー2 (前書き)

ふふ…考えてたんだサボったわけじゃ人だよ…どうせだれも見えてないだろうけど…。

注意事項2 忘れ物はしないことー2

視線が合って、気づいて、目をそらして、それから15秒。ストローの先を加えたまま顎が個硬直していた。

気まずい雰囲気の中、紅葉は薫の法に目を向けないよう、教室の時計を探した。

一方、薫も黙ってストローに噛みついていた。

15秒たってからさらに15秒、時計が秒針を刻んだ。紅葉は重い顎を必死に上げてみる。

「あ、あのさ、今日の朝…背中に『取扱注意』って札。あれって何？」

少し、薫は驚いたのか、しばし視線を移すのにほんの数秒を要した。

「え、えーと、何時も妹に張られるんです。」

ほー。と紅葉は嘆息する。

にしても、なんで覚えてないんだ？いくら記憶力が無くたって、完全に無いわけじゃないし…。

「あ、あの、紅葉さんは本当に私のこと覚えてないんですか？」

そう問われた紅葉は黙り込んでしまう。別に無視をしているつもりはない。ただ、必死に脳内の回路をひっかきまわして思い出そうとしているのだ。

ふじ…と…かお…る、ふじ…とかお…る。

「ごめん、やっぱり思い出せないや。」

紅葉は、ぺこぺこと頭を上下に振りながら、そう答えた。

「紅葉さん…まあ…しょうがないですよね…色々あったわけですから…しょうがないです。」

薫は必要以上に悲しげな顔を見せる。紅葉は、理由がわからないので、キョトンと首を曲げた。

「そ、そんなことより、早く飲んで次廻りませんか？」

薫は、話を途中で切り上げた。相変わらず紅葉はキョトンと顔をしかめている。そんな紅葉を気にせずにいられないので、薫はお金を支払って、紅葉の裾をキュッと引き、連れ出した。

（ふじと…かおる）

紅葉は、ぼけーとしている。薫はしっかりと裾を引っ張りベンチへと誘導する。

（ふじと……かおる？）

「紅葉さん、紅葉さん…紅葉さん！！！！」

（ふじと…かおる…フジと…カオル？…フジト…カオル？）

「おう！！！！？」

「もー、紅葉さん、どうしたんですか？ぼけーとしちゃって、次行きますよ？」

「あ、ああ…ごめん、考え事しちゃうとこうなっちゃうんだ…あはは」

「紅葉さん…そこら辺は相変わらずですね…紅葉さんの悪いところです。」

薫はまた、ニコツと笑う。眩しい。僕の無表情とは（ポーカーフ
エイズ）とは大きく違う。

紅葉はそう思いながら、ベンチに腰を掛けた。

「ふじと…かおる…藤戸…薫…：…うつ」

一つの閃光のようなものが紅葉の頭を駆けた。

次に襲うのは…頭痛…吐き気…紅葉の身体が必死に抵抗をする…
まるで、ソレを考えるの止めさせるように…。

（ねえ…約束だよ…うん…約束だ。絶対だよ？うん、絶対だ。本当
に？本当だ。ずっとそばに——————）

紅葉は気を失った。

注意事項2 忘れ物はしないことー2 (後書き)

気を失う。
(ざまあ
W

注意事項2 忘れ物をしないことー3 (前書き)

過去辺的な何か

注意事項2 忘れ物をしないことー3

「なあ、コーヨー一緒に帰ろうぜ！」

誰だったつけコイツ？……あ、思い出したコイツの名前は光希だ。みつぎ
あれ？おかしいな、懐かしい感じがする。なんでだろう？…まあ
いっか。

「ああ、ミツキ今行くよ。」

僕は、光希のもとに急ぎ足で駆け寄った。背中のランドセルがボンボン弾んでとても肩が痛い。でも僕はそんなことを気にせずに、走った。

「コーヨー、今日さ遊べる？遊べたらコーヨー家行っている？ゲームで対戦しようぜ！」

光希は僕に無邪気な笑顔を見せる。にんまりと唇をゆがませ、ない前歯を覗かせる。

「うーん、多分大丈夫だと思うよ？」

僕は、笑顔を返す。

「んじゃ、あとでいくね！」

そういつて、光希は駆けて行ってしまった。僕はひとりぽつんとその場に止まっていた。…一緒に帰ろうって言ったじゃん…。けどいつものことなのでいい加減慣れてしまった。まあ、光希家は僕の家からは遠いし。

「あ、紅葉さん。」

そんなことを思っていると後ろから声がした。聞き覚えのある声だ。その声の主は*** **。

「う？なんだ***。」

彼女は、少し身体を震わせながら、僕に何か言いたそうに口を動かそうとしている。

「…。あ、あの紅葉さん…。い、一緒にか、帰りませんか？」

最近、距離を置くようになっていたと思ったけど、なんだちゃん

と話しかけてくるじゃないか。今までこうおどおどしてなかったのになぁ。なんでだろう。

「あ、うん。いいよ」

僕は久しぶりに話したこともあって、とびっきりの笑顔を見せた。けど＊＊るは僕から視線をそらす。すこし熱でもあるのか、頬が赤く染まったように見えた。

「こ、紅葉さん：「なぁ＊＊る、熱でもあるのか？」」

僕は＊＊るが言い終わる前に、僕は聞いてみた。

「え、そうですか？」

僕は＊＊るに近づいた。＊＊るは避けようとしたけど、その前にその肩を掴んだ。顔をじーっとみつめてみる。おでこに右手を当てた。熱い。

「熱。あるんじゃない？」

＊＊るは顔はさっきより赤くなっていた。

「……………」

「ま、帰ろうぜ＊＊る！」

僕は、＊＊るの手を無理やりに引いた。＊＊るは相変わらず黙っている。

「紅葉さん。」

「ん？」

「いえ、なにもありません…。」

「そっか」

そのあと僕は＊＊るを家まで送った。

注意事項2 忘れ物をしないことー3 (後書き)

うん。短いショウガナイ(笑)

注意事項2 忘れ物はしないことー4 (前書き)

過去編一だった。

注意事項2 忘れ物はしないことー4

目が覚めるとそこにはどこか懐かしさを覚える顔立ちをした少女が僕を見下ろしていた。

「あ、紅葉さん…目、覚めました？」

これも懐かしい声だった。

僕は夢を見ていた気がする。

……処で、この少女は誰なんだ？

思い出せない。

「あ、あのー紅葉さん大丈夫ですか？」

「え、うん。大丈夫だ。多分……」

「いきなりたれたからびっくりしたんですよ！」

少女は声を張り上げた。とても心配しているようだ。

少女の瞳は大きめで少しつっているようにも見えた。

けれど、優しさがあり。暗くもあった。

懐かしい。こみ上げてくるのは安堵と、……何かが欠落したような。寂しさだけだった。

僕は彼女の顔をまじまじと見つめた。視線がぶつかっている。

少女は、目をそらした。

「えーと、あの、紅葉さん。大丈夫ですか？」

「……。多分。」

「…多分…ですか。」

少女は少々悲しそうな目をした。

「あ、あのー…あんまりそんなにまじまじと見つめないでください…
…てれます。」

少女は、僕から視線をそらした。
頬が赤かったような気がした。

「……あ、あのさ」

「なんででしょうか？」

「いや……なんでもない」

僕は言葉が見つからなかった。：見下ろしている少女が：誰なのか。

—————思い出せない。

この少女はいったい誰なんだろう…。

ここが学校の保健室だということは解っている。

だけどこの少女が：誰なのかが思い出せない。

ふと、少女の口が開いた。

「…。紅葉さん：どうしたんですか？私の顔になにかついてますか？」

少女はきょとんとした顔で、首を傾げた。

「……………目と鼻と口と耳。」

なぜかこういいたくなった。

「紅葉さん：当たり前です。私は人間なんですから！」
そうですね。

「あの、紅葉さん少しお話いいですか？」

不意に少女の顔が真剣になった。

僕はこの顔を思い出せない。

この少女とどういう関係だったか解らない。：この少女は誰なんだ。——あ、あれ？そういえば、なんかしたが柔らかい。

そこで、僕はやっと気づいた。

今僕は、膝枕をされていた。寝そべっていることにも今気付いた。
「おわ！？」

僕はそのことをやっと理解し、その状況に驚愕し、飛び上がった。

「ご、ごめん。なんか膝借りてて…」

すぐさま飛び上がった衝撃を足裏で吸収し、ぺこぺこと頭を上下していた。

「……紅葉さんって本当に何も変わらないですね。」

「…そうか？」

そう言われても僕は困るだけだ。——だって誰だか解らないんだから。

そう思っているとき、少女がすう、と息を大きく肺に押し込んだのに気づいた。

「それですね…紅葉さん……その、私のこと思い出して声かけたんですね？さっきまでのっとおふぎけですよね？本当は思い出してるんですね？昔みたいにからかつてるだけですね？…私のこと覚えてますよね？…さっきのっ嘘ですよね？」

いきなりの質問に…僕は言葉が出なかった。

まるで顎を固定されているような。

逆に顎を動かすのが罪に思えるほどの、…唐突過ぎた質問。

「紅葉さん…？」

「……………」

顎を動かそうとすると、奥歯がガチガチ震えた。

唇を動かそうとすると、前歯が唇をかんだ。

追いつめられた感覚。——どうして？

僕はその息苦しさも覚える感覚から逃げるために、嘘を吐くことにした。

「あはは、あ、当たり前じゃないか！そうだよ…ちゃんとわかってたさ、実は何時ぶりだっけ？って話でもしようかと思ったんだ。」
笑えてるだろうか…いや、自分でも解る。目が泳いで、口元が引き攣っていた。

「…本当…ですか？」

少女はさらに問いかけてきた。

「え、う、うん。」

適当に相槌を打つ。

「……そうですか……よかったです。本当に……」

少女は途中で言葉を紡ぐのを止めた。

「あ、あの紅葉さん。……もう時間もすくなくですけど、残りの屋台。いきましよう？」

あ、そうか今日は文化祭か……俺は軽音楽部で、サブギター、メイ
ンボーカル。

メンバーは、一之瀬兄妹ベース サブボーカルⅡ亮と朔。あとドラムの翔。

そして、この場所は保健室。

そこまでは、思い出せた。

……でも目の前の少女のことは————思い出せない。

じーっと見つめる僕に少女は手を伸ばしてきた。手首を掴まれ、
腕を抱かれた。

少女は無邪気な笑顔を僕に振りまき、

「さ、時間ないですし行きましようよ。」

ことちらの意見など全く無視。というか完全否定のようだった。

この少女には悪いけど僕は嘘をつきとおすことにした。

———こんなに幸せそうな顔をされたら、嫌でも嘘をつかなきゃ
いけない気がする。

注意事項2 忘れ物はしないことー4 (後書き)

記憶消失な主人公君。

注意事項2 忘れ物をしないことー5(前書き)

何事もなかったような清々しさ

注意事項2 忘れ物をしないこと―5

結局、僕はその少女に振り回され、色々と付き合わされた。

今の今までなにをしていたか思い出せないけど。

気がついたら、少女の膝の上で、目を覚まして…。

少女は今も無邪気な笑顔を振りまいている。

とことこと小走りになっては、母校の名前を優しく読んだ「紅葉さん、紅葉さん」て。

けど、僕が感じるのは罪悪感だけだった。――嘘をついているから。

少女は僕に「私を思い出したから」といった。けれど僕はまだ思い出せていない。その少女のことだけ。

他のことは鮮明：そうでもないが覚えている。今日学校へ来る前にドアを直すのを忘れていたことも、先日は妹（小百合）の彼氏さん（純人）を泊めたこともちゃんと覚えている。

それから、ライブをやったことも覚えている。

それなのに僕の目の前に居るその少女の事だけが、思い出せない。いや…：彼女に深く関連していることすべてを忘れている…：思い出させないようにしている？

…：まあ、どうでもいいか。

要は嘘をつきとおせばいいんだろう？

簡単じゃないか。

彼女はちょこちょここちらにやってきて

「紅葉さん、あれ食べましょう？」

…：まだ食べるのか。

僕はそう思いながら半場無理やりに手をひかれる。強引だな。本当にさっきからずっとこんなんだ。

この一時間だけで慣れた気がする。つか慣れた。
僕はいよいよと、連れて行かれた。

そして時間がきて、僕らは帰った。

「じゃあな」

「さようならです。紅葉さん、またあしたです。」
彼女はまた笑顔を向けた。

僕は少し思い出せないことを悔しく思った。

気が付くと、僕はベッドの上で横になっていた。

ドアのほうに顔を向けると、まだドアは外れたままだった。

そういえば、小百合の奴昨日来たのかな？

まあ、今聞けばいいか、

「小百合」

…五秒…十秒。

返事はなかった。

僕は仕方なく、立ち上がって、下に降りる。

「小百合…：…なんだ？居ないのか？」

きよろきよろと視線を動かす。小百合の姿はなかった。代わりに、
紙切れが置いてあることに気付いた。

そこには

『純人とピクニック行ってきます。朝ごはんはレンジの中にあるからチンして食べてね』

「かつこはあとつと…はあ、…リア充が。なんなんだ——」
と、叫びの続きをさえぎるようにケータイが鳴った。
ガチャ

「はいもしもS——『お兄ちゃん書き置きみた？ご飯入ってるから、チンして食べてね。今日は遅くなるから、そう、デートでーとお昼と夜ごはんは自分でよろしくソレじゃ！』」
プツン、ツーツーツ。

…どうして僕の周りの人たちは…こう、身勝手なんだ。
ってまでよ？お母さんが帰ってるはずなんだけど…。
ん？

表示されていた画面には「母」の文字。

ちょっと予感が当たりそうなので無視してみる。
少し経ってから…勇気を出してそれをきいてみる

『あー？あれー？、もう寝ちゃったのかなあ？まあ、いいか。紅葉？
帰りが一日遅れることになりました！以上でえす！』

……はあ。

全然何処もよくなんかないよ。

仕方ないから僕は、昨日のこともあったし、昔のことを思い出そうとした。

…高校デビューの話。

注意事項2 忘れ物をしないことー5（後書き）

ここまでの登場人物紹介

夜崎 紅葉

主人公。記憶喪失。

藤戸 薫

ヒロイン的な立場。昔紅葉と何かあった模様

日野宮 幸助

友達以上親友未満（？）

一之瀬 亮

ベース

先輩。妹あり

一之瀬 朔

サブボーカル

同学年。兄あり

戸三 翔太

ドラムス。

遅刻魔。馬鹿

夜崎 小百合

妹。ツンデレ

リア充

純人

妹の彼氏、名字はきいたことない。

リア充

その他もろもろ。

注意事項3 小さなこともコツコツと（前書き）

特に無し

注意事項3 小さなこともコツコツと

夢を見てた気がするんだ。ずっと長い間。とても長い間。
まだ、数えられるほどの時間しか経ってないんだろうけど。

その、夢は確か、「ボク」が居て、「アナタ」が居て。
それ以外に思いだせるのは、イスと真っ暗な部屋だけだった。

とても暗い部屋の中で、僕はなんども何度も、叫んだ「僕が君を
、僕が君を」

ボクガキミヲ……………。

その間に言葉が成立したのは一度きり。

「僕が…僕が助ける、だから、…泣かないで」
「本当？」

これだけだった。これだけだった。

僕はこんなことを思っていた。

こんな記憶どこからやってきたのだろう。どこか懐かしさも感じるこの記憶はなんだろう。

「アナタ」は誰なんだろう。

「アナタ」の名はなんだろう。

知ってるはず。僕は遠い何処かで「アナタ」を知っている。

そして、僕は「アナタ」と一緒に時間を共有して、体温を感じていた。

まだ、幼くて、まだ、物事もよく理解できていない程。

この、記憶はなんだろう。

僕は、目を閉じた。開いた。閉じた。瞬きを幾度か繰り返して、考えることを止めた。

文化祭が終わってから、数日。今日は木曜日だった。数日、といっても、月曜、火曜、水曜、と三日しかたっていないのだけれど。あれから、僕はあの少女のことをまだ思い出せずにいた。

振り替え休日が終わってからの三日間、あの少女とは何度か会ったけど、軽く会釈する程度で、特に何もなかった。

こびりついて離れない。どうしてこの記憶だけごっそりないのか。

何故か分からない罪悪感に押された。

木曜日だった。

もう、今日も終わる。

時計はもう、12を刺そうとしている。

僕は目を閉じた。

注意事項3 小さなこともコツコツと（前書き）

第二章？

注意事項3 小さなこともコツコツと

あれから、三日。特に何も変わってない。

けど、彼は私を思い出したのだろうか。

一度気を失ってから、「カレ」が「カレ」じゃなくなったような気がする。

昔のあの時の、「カレ」みたいだった。もしかしたら、思い出せていないのかもしれない。けど傷つけないがために、嘘をついているのだと思う。女の勘だ。

けど、今はまだいい。このままで、ゆっくり「ワタシ」を思い出してくればそれでいい。

だけど、完全に不安感が消えるわけじゃない。いくらそれで良いと言いつ聞かせたって、我慢できないときが何時か来る。

どうか思い出して下さい。「私」を「ワタシ」を。私を助けてください。

止まってしまったあの時の時間を、歯車を「アナタ」がまた回して下さい。

思い出して下さい。あの時、青の場所で誓った「約束」を私の体温を、声を、形を。

「過去」に縛られてしまった私を、消えない罪悪感を、止まることを知らない、この欲求を、「アナタ」がすべて動かして下さい。もう一度。

繋がらない思いの言葉。つぎはぎ。縫いあえるように、幅を合わせてみても、どちらかを切り過ぎて、合わない。

たどり着けない。

今日はいい天気だ。

別にそんなわけではないのかもしれないが。

日が昇るのより早く起きた僕は、カーテンを全開にして外を眺めていた。ちらと時計を見ると、まだ4時だった。

（日の出とやらを拝んでやろうじゃないか）

寒いことは解ってたけど、僕は窓を開けることにした。

すー、と寒々しい風が入る。部屋に、口に肺に、その冷たい侵入に身震いをした。

喉元が渴いていく、湿度のない乾ききった空気。喉になにか突っかったように僕はせき込んだ。

「げほ…げおほ！……………ああ、寒。」

外をじっと見ているうちにだんだん、空が明るくなっていくのがわかった。

淀んだ、藍色をした、空が少しばかりの橙色の絵の具で汚されたみたいに。

やがて色は交わっていき、藍色が、紫色に、やがて、その色の配分は橙色が勝っていき、果たして、橙色は、明るい黄色を含んでいた。

ぼくの記憶があったのはここまで。

…済みません寝ちゃいました。

午前8時。

紅葉の部屋は、目覚まし時計の耳障りな音で満ちていた。

——ジリリリリリリリ——

注意事項3 小さなこともコツコツと（後書き）

お寝坊さんな主人公君

注意事項3 小さなこともコツコツと2

…ん。なんでだろうか凄く目の前が明るい。異様に明るい。

目覚ましで設定した時間とは程遠いほど明るい。

けど、目覚ましはなっていない。

まだ、寝ぼけてるな。そうだ。これは夢なんだ。そうだそうだ。

きつと寝ぼけてるんだ。朝なのに昼のような明るさなんて現実にな
いんだ。

実際にお昼になってるって言うことなんか無いんだ。——目覚
ましなっていないもん。

そう言い聞かせてるつもりだった。けど、僕の体からはあふれん
ばかりの嫌な温度の汗がにじみ出ていた。

意を決して、目を開ける。

————ゆめじゃねえ。

心拍数が上がる、まだ上昇。

午後12時。

遅刻決定。今月皆勤賞無し。（別に大事じゃないけど。）先生か
らのお咎め。（機嫌が悪ければ親連の場合あり。）

ああ、いや過ぎる。

何でこんなときに限って寝坊なんだ。

仕方ないから、今日は学校をサボることにしよう。」

僕は、目覚まし時計の横にある、ケータイを手に取り学校への連絡を入れることにした。

(0×0×××9……っと)

ぷるるー、掛かった。がちゃん。

「はい、もしもしA高校ですが、どちらさまでしょうか？」

「あ、一年三組の夜崎ですが、今日は体調を崩してしまって、お休みしたいんですけど。」

「あ、はい、解りました。……担任に『寝坊してサボりたい』、と伝えておきますね?」

この口調、…このツン!とした声音。冗談か冗談じゃないのか、はたまた、もともと冗談など出来ないのか…と、考えさせるほど、冗談が通用しない。そして、みっちりとした授業をした。とおもいきや休み時間は驚くほど優しい。………確かこの人の名前は……一年一組担任、兼国語科。「つんでれ(?)の山家!」やまうち

——ついつい、声に出してしまった。死のう。

「ツンデレの山家?なんですかそれ、というか、先生を呼び捨てしてはいけませんよ?高校生にもなって、そんなことも解らないんですか?先生怒りますよ?良いんですか?」

「うえ…?う?」

「もう、夜崎くん。先生にばらしちゃいますからね。」

「うぶ?…うう、う。」

「あ、あれ?夜崎くん?どう…したんですか?………もしかして、なちゃったり?しちゃってるんですか?…え、え、先生困りますよ電話で泣かれたりしたら……。」

(……話し進めんなかってによお…メンドクサイなあ。)

「紅葉。メンドクサイモードに突入。感覚器官、および五感の感度を25%に下げます。」

鈍感。自発的に鈍感。（もともと鈍感、てか鈍感ってあってるのか？この表現。）

……感覚の遮断でいいか。

「わかりました？わかりましたね？返事はないんですか？夜崎くん？」

先生の話が終わりを迎えようとしているころ、紅葉はケータイを放り出していた。

放り出したケータイから先生の必死に語りかける声が聞こえる。だがしかし。ガン無視。

「夜崎くん？返事：して下さいよ。……先生アホみたいじゃないですか。」

（アホだろ：馬鹿だろ。天然だろ。ツンデレだろ。今日だけで余計な部分まで知った気がする。）

『山家 陽菜ようなのステータス。』

要するについていけないほどの馬鹿。

「——夜崎くん？……うう。」

「!？」

流石に泣き始めるとは思っていなかったので、驚愕する紅葉。あたふたしてケータイを掴む。

「う、うわ、先生済みません：長かったものでつい……」

「そう：ですね。」——長いですね。

なんか、後付けされた言葉には、こもっちゃいけない感情があっ

た。…怖い。

「ふふ…じゃあ、担任の先生にはちゃんと伝えておきますので…
はい。体調に置きお付け下さい…ね。ふふ。」

「は、はい！」

怖すぎて、声が裏返った。——この人やばいかも…。

「じゃあ、きりますねー。さようなら…。」

はあ…。無駄な時間を浪費した。余計なストレスも…募った。的
な声音で。

…。社会は多分理不尽なんであろうと再確認した。

（このあと、どうしようか。仮病で休めることになったし。って
か小百合とお母さんなんで俺を起こさなかった？）

いまさらな紅葉は掛け布団にはいりこみながら思っていた。

ま、いつか。寝よう。たどり着いた答え。二度寝。

『着信アリ 25通』

多分これに気づいてれば。紅葉は助かった。

注意事項3 小さなこともコツコツと2（後書き）

トラブルな。

マフラーもってけ

紅葉は、ベッドの上で、何もすることが無いと。いつてごろごろしていた。今日、こんなにも寝坊したことを振り替えてみようとしたが、持ち前(?)の記憶力の無さで全然覚えていなかった。

「ま、どうでもいっか(笑)」

紅葉は枕を抱いてもう一度寝た。

が、すでに熟睡してしまっていて。寝ように眠れない状態であることに気付き、

「んだめだあ、寝すぎて。ねむれねえ。」

仕方なく、ベッドから起きた。

もう、冬も迎えた昼過ぎは、夏のような炎天下のようなものではなく、サンサンとした、太陽が気持ちよく感じられるほど。若干寒いであろう予感をしていた紅葉だったが、思い切って空気の入れ替えをすることにした。

窓の取っ手に手を伸ばす。――冷たい。

予想の範囲内。けど、やっぱり冷たい。

これはもしや、外はきつと、自分が想像しているよりもずっと寒いのではないのだろうかという思いが横切ったが。このけだるさを吹き飛ばすのも兼ね、思い切って窓バツと窓を。

ビュウッ!

「さ、さみいいいいいいいい!!!!」

半場絶叫、一時的にご近所の視線が気になります。

無意味にそわそわしていることに気付いた紅葉は、開いた口を閉じた。

「暇だ。どうしよう」

まだ自分のぬくもりを感じられる、ベッドに再び突っ伏し。

「今日も、平和だなー!」

紅葉は、何も知らない無邪気な子供のような表情で、上を向いた。
ん？　そういえばやけに寒いよね僕の部屋。

——あ、ドア。

——一方。学校では。

(……うーん、紅葉さん今日来なかったなあ……)

ここは、高校の屋上。

黄昏し、少女A——仮に名前を藤戸薫。ということにしておう。

昼下がり、6時限目とLHRをつなぐ、休み時間（なぜそんなところに休み時間があるかは知らない。）あと数十分で、4時も過ぎる頃。夕焼けに照らされた薫は火照って見えるその頬を、転落防止の柵に肘を置きながら、小さな掌で支えていた。

一度、大きく息を吸い、そのあと、大きく息を吐き出した。

「ハァ……」

悩める少女は、そのため息のせいで一時的に老けて見えた。

「あれから……話もしてないし、目も合わせてないっていうか……」

前々の陰鬱さはなくなったっポイねこの人。時間帯で、人柄が変わる人なのかな。

「明日は……来るかな……紅葉さん……私のこと……思い出して……くれるかな。ハァ」

思いはせる少女は、また、ため息をして下の階へと向かった。

「はい、遅刻」

教室に入って言われたこれが第一声。息を切らして肩を弾ませている少女。

顔を上げるとニヤニヤ顔の人物が見下ろしていた。

「藤戸さん、また屋上ですかぁ？これで何度目ですかぁ？屋上は上がっちゃいけないんですよ？」

若干サド口調で、語尾がウザったいこの人は薫の担任「富武」トミタケ

ステータス…女教師 普通乳 非眼鏡 若干お嬢様気取り 目つきが少し悪くその態度も重なって、黒い噂があるとの噂。生徒のみんなから毒ダケと呼ばれている。理由は先ほどの通り。

「す、すみません……毒……じゃなくて、富武先生。」

「え？毒？え？毒ええ？」

「な、何にもないです。気にしないでください。」

「いやいや、おかしいでしょ、毒ってなんだよどくって！」

「あ、えーと。すみませんでした。」

「……ま、まあいいわまた今度にしましょうほかの生徒の視線がしたいですね。いいですね？今後は遅刻することはないように！」

「………はい」

（……帰りの学活だし、別にいなくなたっていいんじゃないか……）
などと、まったく心の中では反省の意を示していなかった薫だったが、表情だけは「本当に反省してます。」と、上目使いバリバリぶりっこ。隠し通せるのがすごい。（自分はそんなつもりはない。）

「はい、では、先ほどの話の続きをします。明日は、――――」
（くだらない……。学校なんてつまらないよ。紅葉さん……。明日は来てほしいな。）

若干先ほどの火照りの余韻を残しているその頬にまた掌を添えて、グダーっと、毒ダケの話を聞く薫だった。

長すぎる先生のHR、まさにLHR。ついさっきまで、3時過ぎだったはずなのに、もう4時を過ぎてしまっていた。

日はだいぶ落ちてしまい、あたりはもう薄暗くなっていた。

「ねーねー今日、どこかへ寄って帰る？」

今話しかけてきたのは、薫のお友達、園崎歌奈。（ソノザキ カナ）いわゆるマブダチの位置づけにいるのだろう。

「ん？ああ、ごめんね今日はちよつと家で用事があるんだあ。マジごめんちゃ☆」

「くっ、くあいいから許すぜ……」

「じゃあ、明日はどっかいこうね♪」

ばいばーいと手をフリフリ可愛らしくぶんぶん腕を振り、「今日はさようなら」な合図を体全体でかもしだして、先に帰っていく。置き去りの園崎は、まだ終わっていないかった仕度を終え、放課後の暇な時間をゲーセンでつぶすことにした。

「うし、今日はやるぜ、超やるぜ新作アーケード、『鉄骨5』まずは腕試しに、百円でどこまでいけるか挑戦だ！」

固い決意をバッグの持つ部分をギュッと握ることで表し、階段をダダッと駆け下りていった。

「紅葉さん……」

一人寂しい家路は（自分からそうしたのだが）、独り言の遊び場。空を、怪しい目つきで見上げて、薫は、

「明日はきますように……」

願い事をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3597k/>

〇〇取扱注意！！

2010年11月11日16時07分発行